

学位論文要旨

氏名 山内 敏男

題目 歴史事象の相互連関の導出を組み込んだ実践開発研究
－中学校社会科歴史授業における認識の深化を目指して－

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、歴史事象間の関係の多様性と蓋然性の高さが解明できることを具体的な授業において提案し、その特質を明らかにした上で、中学校社会科歴史学習の改善の方向性を示そうとするものである。

社会科歴史学習の目標は歴史事象の名称や順序を暗記することではなく、事象の意味や事象間の関係を明らかにして、社会のしくみ（歴史学習で言えば過去の社会のしくみ＝歴史認識）を理解することにある。しかし、従前から言われているように、学習者の学習方略の実際は「機械的な暗記を取りがちである」という現状であることは明らかである。

本研究では、こうした問題意識をもとに、次の二点を目的として歴史授業を開発し、分析、検討をおこなった。

1. 学習者が有意味学習をおこなうことによる認識の深化。
2. 同時代的な横のつながりを重視し、要因同士の有機的な関連付けをおこなうことの意義とその方法の解明。

二点にとって共通するのが「関連付け」である。学習者が事象間の関係をどう関連付けていくかによって、認識の度合いも異なるであろうし、有機的な関連付けができれば、歴史認識もまた深化される。そして、この問題を解決するために、授業モデルの開発と授業の実践、及びその検証をとおして論の有効性を明らかにしていく。

そのために、まず中学校を対象とした歴史授業論の研究を分析することをおして、その特質と問題点を明らかにした（第1章）。そして、歴史認識の深化を目的とした中学校社会科歴史授業における先行授業実践を分析、検討をおこった（第2章）。その上でその解決ができる授業論、すなわち、既有知識を批判的に検討し、多元的な要因の抽出を経て、事象間の相互連関を導出することを中心とした、認識の深化を図る歴史授業の設計理論を提案した。（第3章）

次に、相互連関の導出を中心とした授業モデルの開発を次の三点の視点からおこなった。

- ① 自然環境の変化に着目した授業モデル（第4章）
- ② 社会構造の変化に着目した授業モデル（第5章）
- ③ 歴史を見る眼の変化に着目した授業モデル（第6章）

①の授業モデルについては、取りあげた時代において、人々が置かれた自然環境下における生活の前提条件や必然性を加味し、「なぜ、結果とする事象のようなことが起きたのか」と問うことでより多面的な視点から要因の抽出と相互連関を導出することの有効性について論じた。②の授業モデルについては、ある社会構造が変化し別の社会構造へと変化する過程を捉え、相互連関の導出により、その時代において共通していた概念を見つけ、本質的なものとして捉えていくことの有効性について論じた。③の授業モデルについては、多面的な理解を阻害する要因である、現代社会に生きる我々の常識や価値観、感覚の特異性が想定される場合において、その感覚を問い合わせことで、扱った時代の世情や生活の実情を考慮した内容の認識が可能となることを論じた。そして、いずれの事例においても、論の有効性を確かめるために、実践を行いその分析と検証をおこなった。

本研究の意義と特質は、次の四点にまとめることができる。

- ① 学習者の既有知識を批判的に検討しつつ、問い合わせによる既有知識の置き換えにどまらない、多元的な認識形成に至る学習方略の有効性を明らかにした点である。既有知識では説明のつかない情報を反証例として提示し、様々な情報の検討をとおして、別の観点からの説明や無視を生じさせることはなく、断定的認識の克服がされることを明らかにした。
- ② 複合的な要因を抽出をする学習方略を提示した点である。要因として従来扱われることの多かった、政治的側面に加えて、経済的側面をはじめとする社会的側面、自然環境の側面などを取り上げることで、扱った事象を複合的に捉えることができることを明らかにした。また、なぜそのような事象が生じたのか、その前提条件や必然性を加味した認識の深化が可能となることを明らかにした。
- ③ 複合的な要因の抽出だけではなく、原因となる事例同士が共時的に連関しているかどうかまで学習した結果、断定的であった認識は構造化されることが示唆された。さらに、新たに習得した内容が他の事例でも活用できるかどうかをあてはめ、検討を行うことで、対象とする事象の共時的な関係を、より幅広く「その子なりの」解釈によっておこなうことができ、かつ要因同士の有機的な関係を相互連関として導出することにより、構造化された認識の習得へと至ることが明らかとなつた。
- ④ 相互連関させた要因の共通点を見いだすことにより、本質的な要因が指定できるという点である。相互連関を、「影響を与え合った関係」と指定させることで、結果として獲得できる認識も多元的なものとなるばかりではなく、その共通点や要因の強さが導出できることから、蓋然性の高い本質的な要因の認識が可能となることが明らかとなつた。